
妖精の死をぼくは見た

naoki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精の死をぼくは見た

【Zコード】

Z8948B

【作者名】

naoki

【あらすじ】

壮介の妹・結衣は不思議な女の子。眼は見えないのに、彼女には普通のひとには見えないものが見えていた。

(前書き)

*死にネタ（登場人物が作中で死亡する話）です。ご注意ください。

「しんじゅつた」

彼女が泣いた。泣いてそう呟いた。だから僕には解ったんだ。
僕が潰してしまったものは、彼女のたつたひとつものだつたの
に。

結衣は不思議な女の子だつた。誰も彼女の言つことを信じようと
はしなかつたけれど。ただ壮介だけは妹が不思議だと知つていて、
それを認めていたのだ。

恐らくは生まれたときから、結衣には見えない何かが覗えていた。
けれど彼女の瞳はまた、何の光も得てはいなかつた。瞼を持ち上げ
ても意味のない瞳。だからこそ、誰も彼女の言葉を信じなかつたの
だと思う。

視力と同じように、彼女の体はいたるところが壊れていた。壮介
には医学的なことはわからないけれど、寝つきりの結衣が長く生き
られないことだけは聞き知つていた。

眠つている結衣の傍らに膝をつくと、いつでも結衣は眼を覚まし
た。ほんの少し身じろぎするから、眼を閉じていてもそれが判るの
だ。

「壮はやさしいね

ベッド脇の植木鉢に水をやつしていると、可愛らしい口元をゆるめ
て結衣が言つ。十をやつとすぎたばかりの妹は、生意氣にも兄を

「壮」と呼ぶ。別に構わないと笑つて許すと、微笑んだ結衣は「壮はやさしい」と言つたのだ。以来、そのように呼ばせている。

「花がよろこんでる。壮がやさしくしてくれるから
「へえ？ 僕には解らないけど」

苦笑しながら言つと、身じろこだ結衣は見上げるよつに顔を向けてきた。

「わらつてるのよ。壮がさわってくれるから。花がよろこんでわらつてる」

結衣は、生まれてから一度も花を見たことがない。けれど彼女には、花がきれいな少女のように見えるという。

それが結衣の不思議。壮介だけが認めている、彼女のたつたひとつの中だ。

花だけではない。風も水も、彼女には何かに見えてこらしかつた。だから、時々こんなことを言つ。

両親は信じてはいない。結衣が同じ事を両親のいる前で言つと、一人は結衣を哀れんで泣く。死期の近い娘が、幻覚か何かを見ていると思っているのだろうか。

だから結衣のことを本当に知つてているといえるのは、壮介だけだつたのだ。

結衣のベッド脇と、それから窓際には植木鉢が並んでいた。結衣には他に友だちがいなかつたから。少女のような姿をした花たちは、結衣に話しかけたり微笑んでくれたりするのだという。結衣が嬉しそうに笑つた。

そうにそう言いつから、自然と壮介は植木鉢の数を増やしていった。世話をするのも壮介の仕事だ。

ゼラーヴムに水をやっていたとき、ふと結衣が呟いた。

「…げんきないね」

「ん?」

「その…」

「まつたな、と結衣が言つ。瞳はやはり固く閉じられたままだ。横たわる妹を振り返つて、それから改めてゼラーヴムを見直した壮介は首を傾げた。元気がないとは、ゼラーヴムのことだろうか。

「別に、いつもと変わらないように見えるよ」

「…」

結衣は答えなかつた。ゼラーヴムは青々と葉っぱを繁らせている。壮介には妹の顔色の方がよほど元気がないよう見えた。近頃結衣は前にも増して瘦せてきている。誰に聞いても、何がいけないのか解らなかつたから、壮介にも成す術はない。

結衣の言葉の意味と衰弱の原因を知つたのは、結局彼女が死んだ朝だつた。

結衣が亡くなつたのは、空氣の冷たい朝だつた。眼を覚ましていちばんに結衣の部屋に行き、水遣りを日課にしていた壮介がそれを看取つた。

とつぐに起きていたらしい結衣が、ゼラーヴムに手を伸ばしていくのを壮介は見た。

「なにして……る、の」

その光景の異様さに思わず舌がもつれそうになる。ベッドから伸びている、もともと細い結衣の腕が、見る間にやせ衰えていくのだ。まるでなにかに命を吸われていくようだ。

そう思つた瞬間、弾かれたように壮介は足を踏み出していた。窓辺に並んだ植木鉢から、正確にただひとつを突き落とすのは簡単だつた。駆け寄つて叩き落した瞬間は何も考えられなくて、道路に当たつて砕けた音が聴こえてから、ようやく自分が何をしたのかを知つた。

きゅっと心臓が縮み上がる音が聴こえるようだつた。とてつもない罪悪感が押し寄せてきて、けれどそれ以上の恐怖に壮介は勝てなかつたのだ。

恐る恐る振り返ると、結衣の顔色は死にいく人のそれだつた。

「……しんじゅつた」

まつしろい顔を見つめていると、妹はやつとの力で唇を動かした。絶望と哀れみと愛しさと、全部ないまぜになつた声だ。その全てが、砕け散つたゼラーハムに向けられたものだつた。

「しんじゅつた」

ぱたりと腕をシーツに落として言つ。震える瞼が涙を押し出して、ほんとうに慎ましやかに彼女は泣いた。最期の涙でさえ、消え入るよに儚かつた。

「……結衣……」

「しんじゅつたよつ……」

呟くような声で彼女が泣くから。だから壮介にはやつとそれが解つたのだ。

彼女は自分の命を与えていたのだ。結衣が見ることの出来る、たつたひとつのもたちに。それが彼女のほんとうの不思議。きつとそれが、それだけが、結衣の生きる意味だった。

そんなことは結衣は言わなかつたけれど、きつとやうだらうと壮介は思った。

「結衣…結衣。結衣

手を握つて名を呼ぶと、力なく握り返してきて、それが結衣のした最後のことだった。

「…結衣。」めんね、結衣

「めんね、と言つたけれど、きつともう聞いてはいけない。そう思つて無性にかなしくなつて、壮介は小さくさがる掌を額に押し付けて泣いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8948b/>

妖精の死をぼくは見た

2010年10月13日03時22分発行